老人性乾皮症で かゆみが起こる訳

石氏陽三
東京慈恵会医科大学 皮膚科学講座 講師

Point

- 老人性乾皮症のかゆみにはヒスタミン以外の要素が重要である
- 乾皮症の皮膚知覚神経は形態的な異常を呈している可能性が高い
- 乾皮症ではアロネーシスというかゆみ過敏の状態を呈している

はじめに

かゆみは掻破行動を引き起こす不快な感覚と定義されています。かゆみは，65歳以上の高齢者によくみられ，6週間以上続く慢性的な症状であることが多いです。高齢者の場合はとくに，患者の心理・健康状態や生活の質に大きな影響を与えることがあります。かゆみの程度が強いもしくは範囲が広い場合など，かゆみの症状が強い場合は，うつ病や不安神経症を引き起こすこともあります。

高齢者の慢性的なかゆみには，皮膚の加齢に伴う生理的変化によって引き起こされるさまざまな要因が関係すると考えられています。加齢に伴う皮脂分泌不足などによる皮膚のバリア機能の低下に加え，免疫力の低下（免疫老化〔immunosenescence〕），神経学的や心理学的な加齢に伴う変化が要因として挙げられます。その他，生活環境，遺伝的要因，併存疾患（慢性腎疾患，糖尿病，甲状腺機能低下症など）あるいは摂取している薬剤（利尿薬，上皮成長因子受容体阻害薬など）などが原因となることもあります。また，かゆみにより皮膚を引っ掻くことで，皮膚バリア機能がさらに障害され，炎症を生じてしまい，その結果，皮脂欠乏性湿疹や貨幣状湿疹となることもあります。さらに，高齢者の乾皮症におけるかゆみの特徴の1つに，かゆみ過敏の状態を呈していることが知られています。通常は，かゆみを生じないような刺激でかゆみが生じてしまいます（アロネーシス）。その結果，かゆみと掻破の悪循環に陥る可能性もあります。そのため，かゆみのメカニズムを理解することは正しい治療を選択するうえでも非常に重要です。

本章では，老人性乾皮症のかゆみのメカニズムについて概説します。

乾皮症によるかゆみのメカニズム

乾皮症は，高齢者に多くみられる乾燥肌症状の1つであり[1]，65歳以上の高齢者の50％以上が罹患しています[2]（図1・図2）。高齢者の皮膚の変化は，乾皮症と関連しています。角質の水分を維持するために重要な要素は2つあります。1つは，角層内での水の拡散に対する主要なバリアを形成する細胞間脂質であり，もう1つは角層内での水の吸収に重要な役割を果たす天然保湿因子です。この両者が失われ皮膚のバリア機能が低下すると，水分が過剰に失われ，皮膚の乾燥が引き起こされます[3,4]。年齢を重ねた皮膚では，①細胞および細胞間脂質マトリックスの変化を含む皮膚のバリア機能の変化，②皮膚pHの変化，③皮膚のプロテアーゼの変化，④皮脂腺や汗腺の活動低下，⑤エストロゲンの減少など（表1）が起こることにより皮膚が乾燥すると考えられています[5]。これらの要因はすべて，かゆみの誘発につながります[6]。

かゆみを誘発する原因

起痒物質

従来よりかゆみを誘発する物質としては，ヒスタミンがよく知られています。しかし，抗ヒスタミン薬（ヒスタミンH_1受容体拮抗薬）は，老人性乾皮症で十分にかゆみを抑える効果が得られないことが知られています。そのため，高齢者における乾燥した皮膚のかゆみの原因としては，ヒスタミン以外の要素が重要だと考えられています[4]。

図1 症例1：72歳男性
背部に乾燥を伴う掻破痕を認める

図2 症例2：80歳女性
右下肢に著明な乾燥肌を認める